

「安家之文」と「五七桐」紋

秋田 四郎

はじめに

本稿は、新井白石が「先住の王家」と述べた安倍氏の家紋「安家之文」と、閣議室の大臣の硯箱や大臣の公式表彰状の真ん中に飾られている華麗な「五七桐」紋とについて論ずる中で、その政府紋章「五七桐」紋の由緒をも述べるものである。

わが国で初めて「桐」紋を一族の象徴としていたのは、平成五年のNHK大河ドラマ「炎立つ」に於いて、「王家」と称され有名となった安倍氏である。

安倍氏が「王家」と称されていた事は、新井白石が、元禄十四年（一七〇一）に「藩翰譜」の中で、「神孫（天皇家）しろし召し給わざりしさに、この国をしろし召しし家・・・故あるべし」と述べ、ドイツの紋章学者HUGO GERARD STRÖHLが、明治初期に日本の紋章を調査して明治四十二年（一九〇六）、ウィーンで「日本紋帳 JAPANISCHES WAPPENBUCH」を出版しその中で、「安家之文」の説明に「Das Kaiserliches Wappen」と書いているので、事実である。その頃、ドイツ国王はカイゼル Kaiserと呼ばれていた。

昭和に至る天皇の世紀を経て、世間通常に、その類いの伝承が今、存在していないのは、仕方がない事と思われる。

安倍氏が「前九年之役」に敗れた後、源義家は、後冷泉天皇に安倍氏征伐の褒美として「安家之文」を所望し、これを賜わり 義家系「清和源氏」家紋である「五七桐」紋が誕生する。

この時まで、義家一族である河内源氏は、戦闘用に無地のままの「白旗」を用いたり、白旗や矢盾に墨を二本引いて、一族の象徴と言うよりは「目印」としており、一族の象徴としての家紋は無かったものと推定される。

「五七桐」紋を象徴とする 義家系「清和源氏」は、その裔に源頼朝や足利尊氏らの開幕の將軍を生み征夷大將軍家を重ねるに及んで、「五七桐」紋は、為政者の紋章としての性格を持ち始め、足利義満が「日本国王」を称してから「菊」と「桐」とを同格に並べる故実を作り、従って朝廷が「五七桐」紋を紋章として用いるようになり、明治政府はこれら有職故実に基づいて「五七桐」紋を政府紋章としたもののようである。また、古代、一族を象徴する紋章を使用出来る者は、厳密に一族の宗家だけであり、その事が義家をして後冷泉天皇に褒美「安家之文」を所

望する理由になったと考えられる。

清和源氏 宗家は多田源氏であり、家紋は「獅子牡丹」紋である。

又、古代、軽々しくは紋章を表にはしなかった模様で、天皇家の「菊」紋は、後鳥羽院の鍛造された刀のはらぎ鑑下という秘所に、十六弁の「菊」紋を刻まれて始めて世に表れる。

史料として現存する文書・絵詞・絵画などを根拠にすれば、家紋は、義家の時代、安倍氏及び、始祖満仲が比叡山延暦寺を勧請して多田院を開基するから、その頃、佛教縁起で佛を表す牡丹と、佛を守る佛母麻耶とされる獅子とを氏族の紋章としたと推定される清和源氏以外に家紋を保有する氏族はない。

義家以降、名門に家紋が保有され始め、鎌倉時代に至り武門に広まり、江戸時代後葉から庶民にも用いられるに至ったと考察される。

一、安倍氏家紋「安家之文」

い、「見査諸家文」と「御紋由緒」

日本最古の紋帳は、応仁之乱（一四六七頃）に際して、東西両軍を識別するため室町幕府評定所で編纂された「見査諸家文」という古文書で、その写本が現存する。

「見査諸家文」は、管領 細川勝元の指揮で編集され、執事 伊勢貞親や執事代 蜷川親元らの有職故実家が関与して完成された室町幕府文書である。

その「見査諸家文」の冒頭には、当然の事として足利將軍家の使用紋である「御紋」ただし畏敬空紋・「惣御紋」・「二引両」の三紋が記載され、特に全262紋中、唯一「御紋」のみには「御紋由緒」が述べられている。

その「御紋由緒」は、

桐者根本安家之文也 而八幡殿貞任御退治

以後御上洛之時 依被願申 下賜此桐文

である。

意味は、「桐は、本来は安倍氏の家紋・文様である。しかしながら、八幡太郎義家は、「前九年之役」で安倍貞任を御退治なされた後、上洛して後冷泉天皇に御願いをされたので、この桐文を下賜された」となり、「御紋由緒」は、「安家之文」から義家系「清和源氏」家紋である「五七桐」紋が創られたと説明する。

義家のこの上洛は、康平七年（一〇六四）の事で、後冷泉天皇の賜紋「桐」義家は、日本の賜紋の嚆矢である。

ろ、後醍醐天皇の賜紋「桐」尊氏

「見査諸家文」が編纂されてから約四十五年後の永正八年（一五一二）に、室町幕府幕臣 土岐伊豆守利綱が小笠原流の故実書となる「家中竹馬記」を著すが、その中に、菊と桐とを弓矢的にしてはならない理由を「きくときりとは内裏様の御紋なり 等持院殿（尊氏）御時桐の紋をば御拝領あり」と書き、後醍醐天皇が足利尊氏に「桐の紋」を賜紋

されたと言う。

沼田頼輔博士は、幕臣 土岐伊豆守利綱の礼儀作法としての著作「家中竹馬記」の「後醍醐天皇 賜紋桐尊氏」を殊更に重視し、「御紋由緒」や先学の清和源氏「桐」紋「二引両」に関する論旨を全て否定し、尊氏まで清和源氏には紋章は無かったとした。

ただし、「二引両」や「一引両」は他家も目印として用いているから、源氏も用いたかもしれないとも述べる。「二引両」についての「初めは家紋とは言えなかったもので目印である」と述べる沼田博士の論旨は、論者も、1本「見番諸家文」の冒頭様式から傍証している。

「二引両」が家紋と認められ始めるのは、室町時代以降で、戦国末期に「見聞諸家紋」がその冒頭様式に、解^{トキ}釈を誤り「二引両」・「五七桐」の紋順で掲げる例を作った事と関係があると考察される。

「見番諸家文」は、有職故実家である細川氏・伊勢氏・蜷川氏が関与して編集されたもので、特に、自分の仕えている將軍家にのみ「御紋由緒」を書き、しかも、敗者 安倍氏家紋から勝者 義家の家紋を創ると言う、「由緒、縁起」には、通常、考えられない縁起でもない事を述べているから、当時、諸説述べられていた源氏家紋についての「由緒、縁起」を正すために、根拠があつて「御紋由緒」を書き残す場としたと考察する。

土岐伊豆守利綱の頃、「家中竹馬記」に述べる事柄が世間通常に言われていた事は、本稿の「五七桐」の朝廷・政府紋章化^ナで論じる通り、事実であつたろう。

賜紋には、紋の無い者にするばかりでなく、有紋者に賜紋して家紋が

変更されたりする場合があつた。

有紋者に賜紋の例としては、寛政二年（一四六一）、足利義政は「片喰^{かたぐし}」紋家の甲斐国主 武田元信に「五七桐」紋を賜い、元信は家紋を改めている。

また、義家系清和源氏には、「五七桐」紋を再賜紋すると言う珍しい慣習があつたようで、その「御紋由緒」によって、天皇と將軍は、家紋を変える事なく再賜紋によつて論功した。

その例は、延元元年（一三三六）、足利尊氏が「五七堂桐」紋家の「吉家」こと吉見頼行に、また、足利義昭が「五七桐」紋家の細川藤高に再賜紋した記録がある。

後醍醐天皇は、建武元年（一三三四）「建武中興」を成功し、「菊」を、家譜に「菊を盃に浮かべて賜わる」とある楠木氏と、その後、宇津木氏に賜わるが、尊氏には「菊」でなく「桐」を賜紋されたと「家中竹馬記」は言う。

鎮守府將軍 尊氏は、征夷大將軍 護良親王と共に「建武中興」第一の功臣であつたが、「菊」でなく「桐」を賜う事になつた理由は、後醍醐天皇が「御紋由緒」を知られており、後冷泉院の故実を守り、そのため尊氏自身も「菊」を望む事はなかつたと考察する事が至当である。

後醍醐天皇は、故実に照らし再賜紋の例を作つて、尊氏を賞したと考察される。

「家中竹馬記」の記事は、「御紋由緒」が「見番諸家文」編纂を廻る百三十二年前、後醍醐天皇の建武元年（一三三四）にも、故実として存在した事を伺わせる内容である。

さらに、「見寄諸家文」を編纂した室町幕府の有職故実家らは、「等持院殿再賜紋」の事実を知りながら「御紋由緒」を記載した事になり、「義家賜紋」「等持院殿再賜紋」の故実は、当時、古くから普通に伝承されていた有職故実の一と推察する事が出来る。

信長・秀吉に至って「菊・桐」の賜紋はおおらかとなり、一族の象徴たる家紋に乱れが生じたが、室町時代以前は賜紋・再賜紋ともに慎重に行われた。

は、黄帝の鳳凰・桐・竹の故事

なお、「家中竹馬記」にある「きくときりとは内裏様の御紋なり」の意味について、「菊」は天皇家の御紋章・文様であるが、「桐」は天皇家の鳳凰・桐・竹の三点文様の一で御紋章ではない事を間違えない注意が必要である。

天皇家は、「桐」を単独で家紋または文様として使用した事は無い。現在も、「恩賜」「賜盃」「叙勲」など「御名」のある書状の御紋は、「菊」の御紋章であり、周囲を「菊・桐」の唐草文様で囲む。

ただし、「五七桐」を天皇が賜紋した例は、尊氏の他にも多く存在する。

鳳凰・桐・竹の三点文様は、天皇の御衣である翹塵（きくしん）（黄櫨染）の御袍の文様でみる事が出来る。

翹塵の御袍は、即位式のテレビ放送で、今上天皇が即位式正殿 紫宸殿に入る手前から見る事が出来た。

今上天皇の翹塵の御袍の鳳凰・桐・竹の三点文様の「桐」は、古来の写実的な形から、御世の隆盛を祝って やや華やかな文様となっていた。

【紋画1】 翹塵の御袍

装束織文圖會

【紋画2】 翹塵の御袍

今上天皇即位式



翹塵³の御袍の初着御は、天養二十一朔旦（一一四四？）近衛天皇である。

何れにしても、「きくときりとは内裏様の御紋なり」は些かファウル気味の文章ではある。ただし、後醍醐天皇の建武元年、尊氏に「五七桐」を再賜紋してから「家中竹馬記」に至る百八十七年の間に、本稿『義満の皇位窺視と「菊」「桐」同格化』に述べる通り、足利義満が「菊・桐」を同格に並べる故実を作っているから、「きくときりとは内裏様の御紋なり」と思われる事が、度々、宮中・朝廷・幕府にあった事実を反映しているものと考察する。

天皇家の鳳凰・桐・竹の三点文様の起源は、「韓史外伝」の黄帝の故事に基づく。

黄帝は支那古代に文明をもたらしたと伝承される聖王である。

『黄帝即位し宇内和平なるに未だ鳳凰を見ず。天老に之を問うて「鳳凰如何と」。

天老答えて曰く。

「夫れ鳳凰は、前を鴻わづらひに後を麟きりんにし、蛇頭にして魚尾、龍文にして亀背、燕つばき頤ごにして鷄喙けい、徳を頭に頂き、義を背に掲げ、仁を心に負い、信を翼に入れ、礼を足に挟み、文を毛に履き、武を爪に繋ぐ。小音は金、大音は鼓、頭を延べ翼を振るえば、五色備つばさに挙がり、住めば即ち安く、来れば即ち喜ぶ」と。

黄帝すやわ乃ち黄衣を服し、黄紳を帯び、黄冠を頂き、中宮ちゆうきゆうに齋く。

鳳凰乃ち日を蔽おほいて至り、帝の東園に止まり、梧樹に集まり、竹を食み、身を歿するまで去らず』

「聖王の在る所、その東園の竹の茂みの中の梧樹の林に、瑞鳥鳳凰が空一杯に集うものである」という意味になる。

天皇家は、黄帝の故事にならない、聖王たることの象徴である鳳凰・梧樹・竹の中の、支那の植生である「梧樹」を日本植生の「桐」に改め、「鳳凰・桐・竹」の三点文様を聖王たる天皇の文様としたものである。

天皇家紋様「五三桐」と征夷大將軍家「五七桐」紋とは、本稿『御紋由緒』の成立』に述べる通り、その縁起により異なる特徴が存在する。

に、現存していた「安家之文」

イ、羽賀寺の草創・炎上・再建

若狭の国小浜は、古来から大陸に国内に、文明を運ぶ要港として重きを成したが、現在、その面影を残すものは、日本の春を告げる三月の行事として有名な東大寺二月堂修しゆ二会にえの「お水取り」で、東大寺の関あ伽井屋若狭井に水を送ると言われる、若狭一の宮 若狭彦神社 別当神宮寺を始めとする多くの由緒ある佛閣と佛像である。

その中に、羽賀の山合に奥まり所有する宝物が若狭随一と言われる羽賀寺がある。

羽賀寺は、元正天皇の霊龜二年（七一六）行基菩薩の草創、行基作本尊十一面観音は元正天皇を写すと伝えるが、村上天皇の天曆二年（九四一）淨藏貴所が勅願寺として伽藍を造営し、後小松天皇の応永五年（一三九八）と、御花園天皇の永享七年（一四三五）、再度の火難によつて堂塔悉く炎上している。

この間、応永年中、青蓮院門跡准三皇 義田親王は、その末寺之由を令されたが、堂塔炎上後、後花園天皇は、寺を奥州十三湊とさんなうとの「日之本將軍」家に賜い、永享八年（一四三六）、檀越 日之本將軍 安倍康季は、莫大之貨錢を捧加し、文安四年（一四四七）、三十三堂宇とも伝えられる伽藍を完成し本尊の遷座を行う。

昭和四十年、文化庁の羽賀寺本堂の解体修理に際し、厨子の棟木に「文安四年」の銘があつて、その事実が立証された。

ロ、村上天皇勅願寺・安倍氏寺たる羽賀寺

津軽半島 日本海岸の十三湊という遠隔の地に在りながら、また、戦

乱最中の「日之本將軍」家が羽賀寺再建の重責を負うに至る理由は、安倍康季が村上源氏・北畠顯家の外孫に当たり、後花園天皇がその故実に基づいて、新しく村上源氏の外戚となった安倍氏に、始めて、村上天皇に対する供養を御許しになったものと推察する事が出来る。

この時から羽賀寺は、村上天皇の勅願寺であると共に、青蓮院門跡の采配の下に、「日之本將軍」家・安倍氏が大檀越となり、寺紋として安倍氏寺紋「檜扇真羽」紋を用い、再三の修理や寺門その他の寄進などを行って明治維新まで続く。

本尊十一面観音の制作年代は、東洋美術史上、「羽賀寺縁起」の通りに靈龜二年（七一六）頃、元正天皇の即位を祝い、行基が都の佛師らに刻めたと推定されるから、本尊十一面観音が元正天皇を写すとする事も、また、認められるものであろう。

また、公開が戦後であったために、創作当時の色彩を保持している日本唯一の色彩佛であり、重要文化財の指定を受けている。

細め半眼に僅か笑みを御含みになる白皙美貌の御尊顔は、思わず息を飲む程であり、飽かずに通う東洋美術史学の碩学も多いと言われる。

ハ、「羽賀寺縁起」と「羽賀寺由来記」

安倍氏が中世「日之本將軍」を称した事は、羽賀寺藏古文書「羽賀寺縁起」に、後陽成天皇の御父である誠仁親王（陽光院）が、天正六年（一五七八）に父君・正親町天皇に贈られたと、慶長五年（一六〇〇）に後陽成天皇が後書した「羽賀寺縁起」という芳翰があり、宮中で作成

され羽賀寺に収められた芳翰に「奥州十三湊日之本將軍為檀越捧加莫大之貨錢造畢後文安四年十一月十八日本尊令遷座也」の文章がある事から、安倍氏が自ら持っていた「日之本將軍」の称号を朝廷が追認した故実があったものと考察される。

「羽賀寺縁起」は、本文・陽光院誠仁親王・御筆、末に・後陽成天皇・宸翰御跋十三行あり」と付記された上で、重要文化財の指定を受けた。

さらに、「羽賀寺由来記」という文化六年（一八〇九）写本によると、「羽賀寺縁起」は、永正十一年（一五一四）後柏原天皇が綸旨を下され、後土御門天皇皇子・青蓮院尊伝法親王が御製になられた化疏に、既に「鴻告之大縁起」として審らかにされていた旨と、陽光院と後陽成天皇の御宸翰がある旨との二通りの事が書かれている。

何れも、「日之本將軍」が朝廷認証の称号である事を証する。

康季が「日之本將軍」の称号を有していただけでなく、「みちのく」は、古くから「ひのもと」称され、秋田家系図によると「日本將軍」の称号を注記された人物が康季以外にもあり、「日之本將軍」又は、「日本將軍」は、安倍氏の公式称号であったと推察する。

二、「日之本將軍」奉納「安家之文」の発見

羽賀寺の美貌の元正天皇観音と宝物に魅せられて、論者は、昭和六十年（一九八八）、四月四・三日、六月十三・十四日、七月二十八日・八月三十・三十一日・九月二十一日・十月八・九・十日、平成元年三月

十五・十六日の十三日間、集中的に羽賀寺を調査したが、調査に興味を示され、御本尊や宝物に手を触れて視る事など、自由な調査をお許しになり、また、調査を共にして下された、今は亡き前御住職 丹生実温法印の温情無くして、日之本將軍 安倍康季奉納「安家之文」の発見はあり得なかつたと、深く感謝を捧げ心からなる御冥福を御祈りする者であります。

昭和六十三年七月頃、撮影した厨子の写真を仏具師と見ていた所、仏具師が「五三之桐がある」と言い、論者も見たが小さくて不分明であった。家に帰り拡大鏡を用いて見ると、何遍見直しても三軸に五個の桐花が付いている。

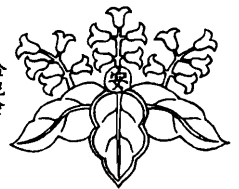
「三軸に五個の桐花」即ち「五五之桐」紋が、紋章学上、「王家の紋章」として世界に紹介された安倍氏の家紋「安家之文」である事は、当時、まだ1本「見善諸家文」を未見ながら、既に、13本「東山殿紋帳」その他によって承知していた。

しかし、「安家之文」が現存するとは夢にも考えておらず、論者は、「安家之文」の発見に驚倒し愕然とした。

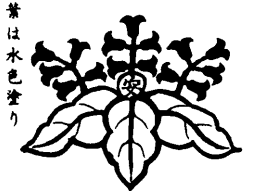
〔紋画―3〕 「安家之文」 文安四年

羽賀寺厨子 推定 当時の「安家之文」

填墨紋



金泥塗り



紫は水色塗り

確認のための文献調査と羽賀寺との往復が始まり、七月二十八日から九月二日に至る四回はそのための羽賀寺訪問であり、実温法印とともに、ほぼ確認の作業を終えたのは八月三十日午後十一時頃の事で、九月二十一日は駄目押しの調査訪問であった。

成果は、十月、一万字程の「調査要約」として、当時秋田大学史学科 遠藤巖教授と当時東北大学東洋美術史学科 上原昭一教授に報告した。実温法印は、御本尊の研究によくお出でになる入魂な上原昭一教授に知らせたという事です。

〔紋画―4〕 安家の三点文様 文安四年

羽賀寺厨子 上欄間 幅十五榿 長一米四十五榿

羽賀寺本堂(重文)の厨子(未指定・調査後、小浜市指定)の正面

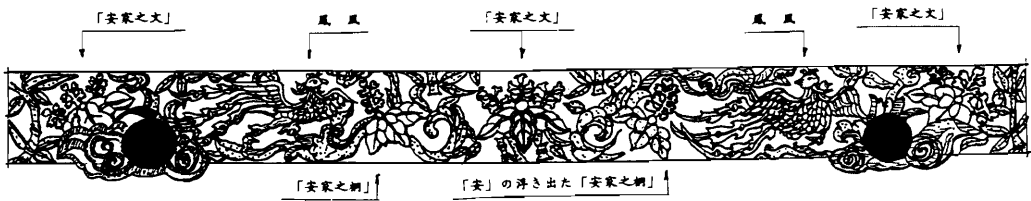
上欄間の彫刻文様は、聖王の象徴たる鳳凰・桐・竹の「天皇家の三点文様」を「安家の三点文様」とし、桐は「天皇家の桐文様」でなく、「安家の桐文様」を用い、中央及び両端には「安家之文」が使用されている。

羽賀寺寺紋には、安倍氏寺紋「檜扇真羽」紋を用い、厨子欄間には、康季当時、後冷泉天皇の故事によって隠紋となっており、正式には使用

出来なかった筈の「安家之文」を、天皇家の三点文様の「桐」に替えて用い、縦欄間には、「安家之文」を後冷泉院に召し上げられた後に使用したと伝えられる「牡丹に唐獅子」紋、ただし、女性には獅子を現さない事を例としていたため、御本尊「元正天皇に配慮して「獅子」を刻まず「牡丹唐草」として使用している様態は、天皇家もお認めになられて、日之本將軍 安倍康季が「先住之王家」の面目を世に施した造営であつた事を伺わせる諸物となっている。

この「安家之文」は、桐花が写実的で花卉が上下に開き二花柄軸が外側へ彎曲している事が特徴で、足利將軍家「五七桐」紋よりも古型である事を示し、桐花が三軸に五個である事と共に、他の桐紋に類例を見ない日本唯一の、「御紋由緒」に「桐根本安家之文也」と書かれた「桐」紋である。厨子上欄間は、縦欄間に使用されている「牡丹唐草」と共に、鑿跡の鋭く残る大変に古拙的にして豪快と言える、康季当時の彫刻である。

「欄間彫刻」は、安文七年（一七七九）に塗り替えたので、度々の改造のある厨子とともに重要な文化財に指定されていないが、塗り替えには漆のはみ出しが有るなど、やや、丁寧さに欠けるから、



鑿跡の鋭く残る康季当時の彫りを復元し、当時の絢爛たる塗りを再現して、新たな基準により、重要文化財とする価値ある美術品と観察する。

二、清和源氏家紋「五七桐」紋と「二引両」「惣御紋」

い、清和源氏の家紋

清和源氏の系図と各支流の家紋とを対応して表示したものが、「図1 貞純親王系 清和源氏之系図及び家紋」である。

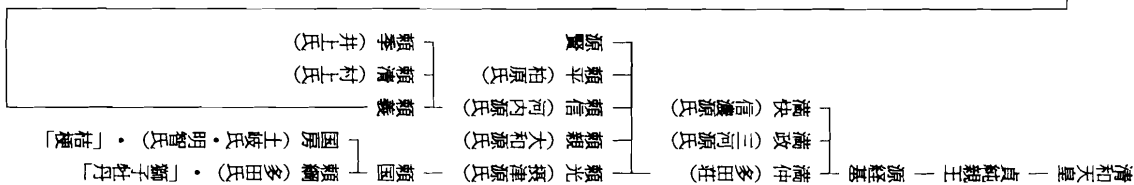
家紋は、宗家多田氏の「獅子牡丹」紋、土岐・明智氏ら国房系の「桔梗」紋、佐竹氏ら義光系の「扇子」紋、甲斐武田氏ら義清系の「片喰」紋、南部武田氏の「松皮菱・武田菱・菱片喰」紋と明瞭に家系にしたがって異なり、義家系の家紋は、「御紋由緒」や「征夷大將軍家」の名誉と共に別紋を用いる家は少なく、源家頼朝・範頼以下新田・足利・畠山・細川ら約17家が「五七桐」紋を家紋とする。

ただし、頼朝については子孫が絶えたために実証ができず、弟 範頼の嫡流で江戸時代には上領氏となる吉見氏が、家譜には「五七堂桐」紋と称し、寛保二年（一七四二）、日光含満ヶ淵に「五七桐」紋の墓碑を建立しているから、頼朝・範頼も「五七桐」を用いていたと推測する事が出来る。

また、頼朝麾下で藤原氏征討の「奥州征伐」に従軍し、胆沢城に奥州総奉行「留守職」となる伊沢家景の後裔「留守氏」の「五七桐」紋と、「留守職譜代」と伝承する本籍水沢市 大友（おおとも）氏が所有する、

系図は、讀史總覽・多田寺略記より。
家紋は、「昆蟲諸家文」・家譜より。

家紋



『桐根本安家之文也 而八幡殿貞任御遺治

以雙柳上各之寺 依波願申 下陽比附文 見查諸家文

★「再賜紋」の例

●延元元年1336尊氏再賜「五七桐」吉見賴行

(氏)・「五十堂椿」(前頭定紋之伍、?)
(氏)・「右田」(前頭替紋之伍、?)

「家氏(大館氏)・一五七梅」
政氏——義貞

(氏)・「五七桐」
 (氏)・「五七椿」

「五七桐」●九杉十二38 著阿耳脚一五七桐「藤電
家氏(斯波氏)・「五七桐」

・「五十桐」★「平眼鮫」の例
頼氏（足利氏）・「五十桐」——尊氏

● 寶正万全 1334
後醍醐天皇再賜

氏・金三氏)・「五七癩」

●寛政二年(1461)義政賜「五七桐」甲斐国主武田元信

星經

・ 鄧氏)・「菱片喰・武田菱」

[註 1] 源氏物語 説

源氏は、天皇の御子に賜われた「賜姓源氏」六十数家を言い、清和天皇の「賜姓源氏」九家を「清和源氏」と言う。その中の一家「貞純親王系清和源氏」は、更に、多田源氏・河内源氏などの末裔清和源氏に別れる*（源氏・皇統系）

通常、「清和源氏」とは、「貞純親王 系 清和源氏」を言う。

二、「賜姓源氏」には、嵯峨・仁明・文徳・清和・陽成・光孝・宇多・醍醐・村上

華山・三條、後三條、順徳、後嵯峨、後深草、應山、後三條、正嘉明の十八、
姓源氏（六十数家）「があり、それぞれに末裔源氏がある＊
（注）

藝家系 清和源氏の「五七桐」使用については、古くは史料に乏しく、実証が難しい。

二、 星野恒文学博士は、足利氏御紋を典拠に、頼朝の「五七桐」紋使用を推定したが、

本系図では、寛永嬪柔吉見上御家の墓碑に於いた「五七等柁」及び箱柁大友氏の家紋紋鑑に記載されている頼朝賜「五七柁」と留守氏「五七柁」紋を確認し、

頼朝の「五七桐」紋使用は傍証されたものとする。

詳細は、本文「二、清和源氏の系図及び家紋」、清和源氏の系図」を参照の事。

〔清和源氏の系図及び家紋〕 終

寛政二年（一七九〇）二月に写本の「大友家紋鑑」にある「五七桐」紋は、頼朝が使用した「五七桐」紋の形を傍証する。

「留守職譜代」大友氏は、相模国大住郡波多野荘・足柄上郡大友（おども）荘一帯の大領主 波多野氏一族で、大友荘一帯の領主 波多野号大友 四郎経家または経家の弟 義景の後裔に擬される一族である。波多野義景は、「奥州征伐」際し所領を子に譲り帰国しない事を期して出陣し、頼朝の御感を被ったと記録される。

大友氏の「五七桐」紋は、もと、定紋であつたが、伊達氏に仕え主を憚り「提灯紋」として「大友家紋鑑」に所載される紋で、「頼朝賜」と口伝されて一族の行儀を規範し、康季の「安家之文」よりも古型である事を紋章学上証明出来て、他に類例を見ない。

留守氏「五七桐」紋は、「安家之文」の古型を残しながら足利氏家紋に近い。

「二引両」は、既述のように家紋の中の定紋や替紋のように格式の高いものではなく本来は「戦闘紋」と称すべきものである。

安倍氏においても「前九年絵詞」の「貞任出陣之図」における矢楯に「巴藤」紋まがいの紋が描かれているが、これは安倍氏の「戦闘紋」であると考察され、後年の作であるために「巴藤」紋様に描かれたが本来は、桐葉なしの「乱れ桐花」紋であつたと推定する。

これら「戦闘紋」は、武将たちの家紋に広まったと考察する。

「惣御紋」は、表に常用はしなかつた定紋「五七桐」に替えて、調度や襖などに用いられたもので、或いは足利氏文様と称されるべきものである。

ろ、清和源氏紋を誤った將軍家綱

現在、「龍胆」紋を清和源氏紋とするものがあるが、「図一貞純親王系 清和源氏系図及び家紋」の通り、室町時代までは清和源氏に「龍胆」を家紋とする家はない。

徳川氏 第四代將軍 家綱は、徳川氏が「清和源氏」新田義季系を称した事に関わつてであろうか、清和源氏発祥の地 摂津国多田庄にあつて衰退していた開祖 満仲創建の多田院を、「源家長生之守護神」多田神社として寛文延宝年間（一六六五―一六七六）に再建したが、延暦寺末寺としての寺紋「獅子牡丹」紋を、その時に、神紋「龍胆」紋にしたと考察する。

寺社が再建者の意思を尊重して紋を変更する例は多いから、神紋を「龍胆」紋としてもよいが、多田神紋は、義家後裔たる征夷大將軍 徳川家綱の勘進する「源家長生之守護神」としたのであるから、清和源氏征夷大將軍 家紋「五七桐」紋とする事が好ましいと思ふものである。

江戸時代初期は、戦乱の世を経て家系や家紋には少なくない乱れが生じていたが、家系をおおむね整理出来たのが寛政元年（一七八九）の「寛政重修諸家譜」であり、家紋について初めて考証をした者は新井白石で、立雪斎蔵紋尽「見聞諸家紋」を参照し元禄十一年（一六九八）頃、自著「紋尽」を著すが、家綱の多田神社再建の約三十年後になる。

これらから考察すると、將軍家綱は幕閣の補翼宜しきを得ずに、神紋の選択を誤つたものと推察される。

しかし、この影響は大きく、多田神社再建から百年以内の著書と推定され、各大名家の家紋の縁起を解説する「諸家紋起抄」²¹に、征夷大將軍源頼朝を称える表現として「頼朝公は 紋所 笹りんどうに二つ引領・・・」が多用され、写本され伝聞されて「清和源氏 紋所 笹りんどう」が広まり、誤って「龍胆」紋が義家系清和源氏紋の名を得る事となる経過を見出だす事が出来る。

「龍胆」紋は正しくは村上源氏の家紋であるから、義家系清和源氏を称する家で「龍胆」紋を家紋とする家は、何等かの家紋縁起が存在すると思える。

また、沼田博士は、「笹りんどう」は「龍胆」の別称で、呼称としては正しくないと云っているが、先祖伝来の呼び名は、家紋に限らず家紋縁起とともに正しく伝承する事が、学問上もまた、大切であると思えるものである。

なお沼田博士は、「龍胆」紋を「清和源氏」家紋とする事の誤謬を指摘して、「寛政重修諸家譜」出自清和源氏の家千八百十ありて、うち、龍胆を用いるもの四十三にして、文学博士 星野恒の論ずるが如く、村上源氏の諸氏がいずれも龍胆を用いるを以て、誤り混じて清和源氏の家紋となせしものなりとの説、寔に正鵠を得たり云うべし」と述べている。

「龍胆」紋は、本来の征夷大將軍家「清和源氏」家紋ではない。

三、「安家之文」が導く「五七桐」紋

い、「御紋由緒」の成立

「安家之文」を「御紋由緒」の通りに取り扱うと、「五七桐」紋が導かれる。

これは、「御紋由緒」には、「縁起・由緒」に通常含まれている神秘的文言を含まず、実態的語句によって構成されている事と合わせて、「御紋由緒」が確かな故実である事を示すと考察する。

これに対して「二引両」³には、尊氏に係り神秘的文言を含む御紋由緒が存在する。

まず、「安家之文」を置く。次に、「八幡殿貞任御退治」であるから、「安家」を示す「丸に安」の「安」の字を消す。さらに、「丸」を小さく残して、「安家」の存在した事と退治した事を現す。

そうすると、真ん中の花柄軸の「安」の字の消えた分の空間が出来て、バランスを失うので二花を加えると、中軸の桐花は七となり「五七桐」紋が出現する。

即ち、勝利を宣言する義家の家紋「五七桐」紋である。

義家は、このように考えて「五七桐」紋を創り、その事が語り伝えられて「御紋由緒」の語句が形成され成立したと考察する。

「安家之文」は、勝者が敗者の「象徴」を望むほどの、又、天皇に御許しを頂かねばならない程の重みがあつた事になるが、一体それは何であるのか興味を覚える。

「五七桐」紋の中軸の下の「丸」は、「安家」を表わす。

ここで、天皇家の三点文様の「五三桐」文と義家系「清和源氏」の「五七桐」紋との差の明白な理由が判明する。

天皇家の「桐」文様は、「八幡殿貞任御退治」と関わりないから、「五七」の桐ではなく「五三」の桐で、中軸の下に「丸」は無く、「韓史外伝」を出典とするから、「桐花」ではなく「桐の蕾」を用いる。

ろ、フーゴ・ストロールの逆説明

日本の家紋を世界に紹介したフーゴ・ゲラルド・ストロールは、「安家之文」について、「王家の紋章」と記し、他の家紋には付けていない創作の経過を付し、「中軸の下に二花を安倍姓の初字 安 に替える」としている。

「御紋由緒」による「五七桐」紋の誘導と逆の説明になっている。

ストロールは、「王家の紋章」と記述するに際し、複数の人物に由緒を正したろうと思うが、教えた人物は、ストロールの調査対象であった皇族・華族・陸海軍などの中の、安倍氏が古い王家である事を知っていた人物で、当時、既に使用紋家の滅亡しているものを教えたのであるから、学識の高い人物であった。

したがって、事実は正しく教えたが、ストロールに日本の歴史からの解釈が困難で、簡単に「日本紋帳」のような解説になったと推察される。ただし、ヨーロッパに無い桐花の一枝を精細な写生で描いているから、欧米人に判り易い合理的な説明に努めたもので、ドイツ人としては

やむを得ないものと解釈する事が出来る。

しかし、ストロールが特に付した逆説明は、教えた人物が前述の『御紋由緒』の成立』のように教示した事を示唆する。

なお、フーゴ・ゲラルド・ストロールの「日本紋帳」は、家紋のみならず旗差し物・毛槍・纏い・車旗・軍旗に至るまで遍く収集しており、優れた業績であると賞賛するものである。

四、「御紋由緒」と「安家之文」を拒否する者

「御紋由緒」と「安家之文」を拒否した者がそれぞれ一人いるが、それらに付いて論述する。

い、沼田頼輔博士の「御紋由緒」否定

沼田博士は、土佐藩主 山内家の家紋由来の調査依頼を受ける事を契機に、日本の家紋千数百を調査し、古典に照らし、先学を顧み、大正十四年（一九二五）、「日本紋章学」を明治書院より刊行し、翌十五年、その功により「学士院恩賜賞」を受賞し、昭和五年、文学博士の学位を授けられ、昭和九年十一月二十七日、帝大病院で歿した、日本ただ一人の紋章学の権威である。

今、刊行されている紋章に関する出版物は、その殆んどが「日本紋章学」を引くもので、紋章についての研究に沼田博士を凌ぐものが出ておらず、二三の批判は論じられているが、その具体的論文は発表されてい

ない現状である。

なお、現行の紋集の誤りは、全ての家紋を「黒地に白」で描いている所にある。

家紋は、「見聞諸家文」の古来から、「見聞諸家紋」、諸「紋盡」、諸「武鑑」、諸「士鑑」は言うに及ばず、「白地に黒」を以て描く。

しかし、江戸中期以降、黒紋付きの全国に及ぶ流行を見て以来、呉服商のために黒紋付き用の「黒地に白」で家紋を描く、例えば「御召縫入御紋本」の類いの紋帳が流行し、特に明治三十六年二月に「紋かがみ」が出版されて「家紋の染織」に関する不安を一掃し、以来、類書が逐次に刊行された。

さらに、昭和七年七月、名を「紋典」²⁴と改め、染織用家紋の統一を使命とし、「紋典」の刊行は昭和六十三年まで22版に及んでいる。

現在、家紋に関する執筆者達は、「紋典」などが染織に関する家紋の紋帳である由来を知らずに、「黒地に白」の家紋を引用している。

紋章を論じる者は、呉服商のための家紋の染織に関する紋帳を参考にしたとしても、家紋の古典を尊重し、家紋には縁起や由緒が必ず存在するものであるから、それらを検討しながら、「白地に黒」で家紋を描く見識が必要である。

「紋かがみ」「紋典」などは、美術的な観点からの創作や美化や醜作や異作を採録している。これらは、家紋と言うよりも、文様と言うものである。

現在の家紋集で、白地に正しく家紋を描くものは、統群書類従完成会の「寛政重修諸家譜 家紋」という墓碑紋を拓本したものであるが、こ

れを「縁取画法」で描けば「新 見聞諸家紋」と呼べる。

「日本紋章学」は、勿論、「白地に黒」で家紋を描いている。

その「日本紋章学」に沼田博士は、「御紋由緒」を「寸毫も信ずるに足らず」と論じているのである。

その論拠を点検し、その説の誤謬である事を論証する。

1、官撰でない四百五十年前の文書は信憑出来ないとした事。

文学博士 星野恒は、『頼朝の紋章』²⁵を発表し、「見聞諸家紋」の「御紋由緒」を典拠に、「足利氏は頼朝の例に依ったから、頼朝は、「龍胆」ではなく足利氏と同様に「二引両」・「五七桐」を用いたであろう」としたが、沼田博士は、官撰でなく、東山殿時代に、その四百五十年前の事を書いたものは信憑出来ないと云うのみの論拠で、星野博士の論文を退けている。

見聞諸家紋の12本「松岡本」及び14本「群書類従本」に、「于評定所改之悉次第不同書顯于是」と後書されて、室町幕府評定所による官撰である旨を注記しているものを、博士が見落としたまま、具体的理由を示さず排除した事になる。

なお、「御紋由緒」を所載する「見聞諸家文」に関する研究は、沼田博士の時代より進み、官撰「室町幕府文書」である事が詳しく明らかとなっている。

口、家紋は一家に一個、鎌倉時代に生じたとする事。

沼田博士は、「見聞諸家紋」に定紋のほかに傍らに別の家紋が記載されていて、家に定紋である家紋と、旗紋または幕紋などの別紋とがある事を示している重大な事実、そして、武家には常識である家紋の種類、定紋・替紋・翳紋・幕紋・旗紋などの異なる紋のある事実について述べていない。

そのために、博士の家紋の概念が不安定なところがあり、文様や幕紋の事を論じているのに、何時の間にか、定紋の論述に変わると言う論理学上の「概念変更の誤謬」を冒し、論旨不鮮明にして論評が出来ない所が存在する原因を作る。

断定していると判断される論点、家紋は一家に一個、衣服文・幕紋を起源として鎌倉時代に生じたと諸史料上論じる事は、一族の象徴たる定紋を軽々しくは用いなかったために、史料として鎌倉時代以前のものが少ないと言う事を証するに過ぎず、また既に、衣服文・幕紋が存在していた事を述べているから、家紋が鎌倉時代に生じたと断定する事は出来ない。

現存諸史料上、鎌倉時代以前には家紋は無いとし、それ以前の天皇・家・安家・源家の三名門に関して述べる史料「御紋由緒」を否定する立論は、論理錯誤があり論証不十分である。

沼田博士の仮説「後鳥羽天皇が御紋章や家紋の嚆矢」とする事に拘って、やや強弁しているものと推察する。

ハ、御紋章の後鳥羽天皇起源説を唱える事。

天皇家家紋は、三十二弁の「十六弁八重菊」紋また「御紋章」と称するが、沼田博士は、その起源を後鳥羽天皇とする仮説を初めて提出する。

沼田博士は、後鳥羽天皇起源説を提出するに先立ち、薄弱な論拠を以て先学の諸説を排除し、また、バビロン学会主宰者 原田敬吾が、バビロンに紋章が存在することに留意している所に啓発されて、バビロン学会に所属したが、学会論文として発表される要旨「菊花紋は、バビロンよりインド・支那・朝鮮にも行われた故に、日本の菊花紋もまたこの系統より出でたり」とする諸説を、「バビロンの建国は紀元前三千年に遡り、皇室の菊花紋の起源は後鳥羽天皇であり、その間四千年を隔つれば、この説は到底これを信ずることを得ず」と、「到底これを信ずることを得ず」の独断を以て反論し、「御紋由緒」否定と同様の誤った論理によって退ける。

さらに、文学博士松本文三郎の「印度雜事」に述べる要旨「菊紋は東洋諸邦至る所の裝飾にあり。子細に觀察すれば関連歴然たるを見るべし。人或いは思う。菊紋多けれども十六葉菊紋はあらざるが如しと。十六葉菊紋をビシャワールのイブラヒム・ロザの墓の裝飾に認め得たり。紋章は菊を象るものに非ず。東洋諸邦の菊紋は人類思想の自然に成れるものなり。円を四分して十の四葉、さらに八葉、これを重ねて十六葉とす。或いは日車に、蓮華に、菊に似たるあらん」に対しても、「外国伝来と言う事はその当を得ざるが如し」との独断をもって排除する。

ただし、蓮華紋が後鳥羽天皇より以前から日本に存在する事に留意し

て、「菊紋は、蓮華紋より変化せしもの」と言うあれど、是は全く誤れるものにして、菊花は初より菊花を象るものなり」としながら、「但、菊紋が、その制作の意匠手法を蓮華紋に学べるある事は、これを想像するに難からず」と、独特の沼田論理を以て結ぶ。

なお現在、沼田博士が剥きになって否定した諸説が「古代オリエント史」の解明により充足展開し、世界文明の発祥メソポタミヤの楔型文字は「神」「王」を、放射状のロータス紋の弁数に仮託して現す事が明かとなって来ている。

紀元前三千年代、「神」をロータス紋四弁で *ro-ta-s* と発音し、神聖を高めるために四弁を重ねて八弁とし *ro-ta-s* と発音して「最高神 アン」を示す。

さらに、八弁を二個並べて計十六弁とし *ro-ta-s* と発音し「最高神 アン」の神格を上げ、紀元前二千年代には八弁を重ねて十六弁とする。そして、紀元前二千三百年代に、アッカド王ナラムシンの碑では十六弁を二個並べて三十二弁としている。

御紋章「十六弁八重菊」は、シュメール楔型文字「神」を象り、神聖を強めるために次第に重ねたもので、メソポタミヤの原始信仰に淵源し、日本では菊紋・蓮華紋と言い、古代から神、王、仏、キリストを現す世界共通のロータス紋の中の最高のものであると考察する事も出来るのである。

また、三十二弁は、アッカド王ナラムシンと、日本の天皇家は数家³²にだけ用いられている紋章であり、日本で初めて十六弁を重ねて三十二弁となる事など、和漢に限定した論説でなく、汎世界的視点に於ける普

遍論による論説の展開が可能になって来ている。

ここで、日本最初の紋帳「見眷諸家文」の「菊」紋は、十字の三回重ねの三十二弁で描かれている事に括目すべきであると注意を喚起する。

諸先学の諸説を要約すれば、「御紋章の原始はよく分らないが、後鳥羽院が隠岐で鍛えられた刀剣の *はきした* 下に十六弁の「菊」紋を刻まれ、天皇が御衣に菊紋様を用いられ、次第に御紋章になった」としていたものを、沼田博士は、「御紋章は後鳥羽院が初めて御使用になった」とした。

これは、後鳥羽院が初めて *はきした* 下に十六弁「菊」紋を刻まれたから間違ではないが、読者をして大変な錯誤を生じる悪文で、現在、「御紋章の起源は後鳥羽院」と言う説が信じられて、誤った俗説となる原因となった。

後鳥羽院が刀剣の *はきした* 下という見えない秘所に、何故、初めて二十六弁を刻んだのかと言う事こそ研究の対象になるもので、平常の御衣には菊の咲き乱れる様を文様とした事と対比して、興味あるテーマを提供しているものと考察する。

二、沼田博士は時世に順応して否定した事。

沼田博士は、初めて、日本の家紋について「日本紋章学」を創設し、未だ、これを越える学説を見ない程の業績を挙げながら、何故、「御紋由緒」「御紋章中東関連説」について、論拠を挙げずに「寸毫も信ずるに足らず」「到底これを信ずることを得ず」「外国伝来と言うは当を得ざ

るがごとし」という独断を以て否定したのであろうか。「日本紋章学」の全内容に鑑みて、到底、沼田博士の学問的推論とは考えられない所がある。

しかし、「日本紋章学」の発刊は、大正デモクラシーの言論の自由から、美濃部達吉博士の「天皇機関説」に対する弾圧などの皇国史観への転換期に当たり、そのため、当時の国賊である安倍貞任の家紋を謳う論説、また、危険視されようとしていた「日猶同祖論」に組する論説は、時世に大きく逆らうものとなる危険があった。

そのらの虞れのために、時世に逆らわない論説をつくる事は、史家として司馬遷以来の宿命であり、やむを得ない所を理解する事が出来る。

「御紋由緒」「御紋章中東関連説」を否定する沼田博士の論理の錯乱、「寸毫も信ずるに足らず」「到底これを信ずることを得ず」「外国伝来と言うは当を得ざるがごとし」と言う感情的否定を読めば、沼田博士が真実に到達していたと言う憶測を生む。

しかし、そのもたらす虞れのために敢えて否定を論じ、後人をして熟慮を誘う論説とする事がある。

本稿関連では、「三春猫騒動」を否定した「三春町史」を指摘出来る。

本稿は、「三春町史 二巻」特に「第二節 歴代藩主と藩政 二、お家騒動」、「三春町史 八巻 近世資料」及び「東海女子短期大学紀要第三号 戦国武将とその子孫」の原典「江幡家文書」また、羽賀寺藏文書である酒井氏小浜藩に仕官した「安倍英季家譜」その他「秋田氏関係史料」を詳細に点検し、「三春町史」が贈収賄事件であるとすると「正徳・享保事件」は、「三春猫騒動事件」であると云う立場にある。

沼田博士は、「日本紋章学」の冒頭自序において「浅学非才を以て、その所説ややもすれば、偏見独断に陥りしもの又少なからざるべくして、期待に反せし事あるは、余の衷心甚だ安んぜざる所なり。希はくは不完全ながらも、組織的に日本紋章学の基礎を築きし微衷に同情せられ、誤れるを正し、足らざるを補い、この学をして発展完成せしめられんことを」と世に質している。

学論の創始に当たり、論説の識別を明かにし、討論の隆盛を期するために、敢えて鮮明に仮説を掲げて一つの体系を提案する事は、しばしば意識的に存在する論説である。

「日本紋章学」には、名門の家紋を論じるために、仮説とある種の制限とが確かに、存在している。現在、家紋検証に係り、ある種の制限は、全く無い訳ではないが、相当に開かれいると思う。

沼田博士の期待に沿い、「日本紋章学」を越えて、家紋の由緒・系譜などの体系を新しく構築する時期にあると思う。

ろ、秋田千季の「安」の字塗潰し

「安家之文」調査に際して、次の事項が明かとなっていた。

イ、「安家之桐紋様」に「安」の字が薄く見える事。

「安」の字が薄く見える理由は、金泥で塗り潰していたものが、永年のはたき掛けなどの掃除で金泥が次第に禿けて、下の「安」の字が浮き

出たものと観察された。指で強く拭いてみたが、金泥は、その程度では少しも禿げなかった。

「安」の字の痕跡があつたのは、以前に再彩色が行われ、その際、「安」の字を塗り込める、異例な事実があつた事を示す。

口、「安」の字には疵がある事。

疵は、縦横に数本あり、「安」の字を消す型になっているから、「安家之文」に呪詛をしたか又は、調査をした者がいた事を示す。

羽賀寺記録に基づき「再彩色」の時期を調査したところ、一回だけ、安永七年（一七七九）に「厨子之彩色」が行われ、この時の檀越は、三春藩主 秋田千季である。

千季は、「三春猫騒動」の後に就封した荒木秋田氏 第四代で、その三十六年後の宝歴七年（一七五七）に藩主に就任し、四十年間在任している。

「三春猫騒動」は、安倍秋田氏の三春藩主 第三代 輝季及び世嗣就季の、就季自身を含み、若君9人が全員、及び 若姫11人中8人が早世すると言う事件を経て、享保五年（一二二〇）九月十九日、安倍秋田氏最後の藩主 輝季が歿して安倍氏御嫡宗は滅亡すると言う事件である。

後、幕府は、三春藩の実態のままだに、「三春猫騒動」の張本人と推定される藩大老 荒木玄蕃の嫡で、三春別藩主家に養子となっていた頼季を藩主に任じ、三春藩主は、荒木秋田氏に更替している。荒木氏は、安倍秋田氏との婚姻を通じ、外戚にはなっていた。系図を示すと「図12

荒木高兼系秋田氏系図」の通りである。なお、藩大老家 荒木氏は、幕府大老家 酒井氏一族の「將軍家を凌ぐ大名お取潰し仕置」の意思に適い、三春藩の篡奪に成功したと考察する。

荒木秋田氏 初期四代の七十六年間を調査すると、種々の特異と思われる事が存在するが、その主なものは、次の通りである。

○ 藩主は妾腹が就封することになる事。

幕閣老中安藤対馬守は、荒木秋田氏 初代頼季の世嗣に妾腹を指名し、以後歴代、妾腹を世嗣とする先例となり、安倍秋田氏の慣例である嫡出が世嗣となる事はなかった。

又、荒木秋田氏 二代治季・三代定季は、大名家から迎える慣例の正室を迎えておらず千季は、大名家から正室を迎えた荒木秋田氏初めての藩主である。

「三春猫騒動」による藩内外の動揺が漸く治まり、名実共に荒木秋田氏の治世になった最初の藩主と推定される。

○ 將軍拝謁の席次が降格される事。

頼季の次の治季の時から、將軍拝謁の席次が、侍従の席から一等降格して四品の席となったが、「三春猫騒動」に対する婉曲な幕府の処置とも思考される。

荒木秋田氏藩主初代 頼季は、「秋田家系図」に「家臣 荒木玄蕃嫡」と出自を記載されている。

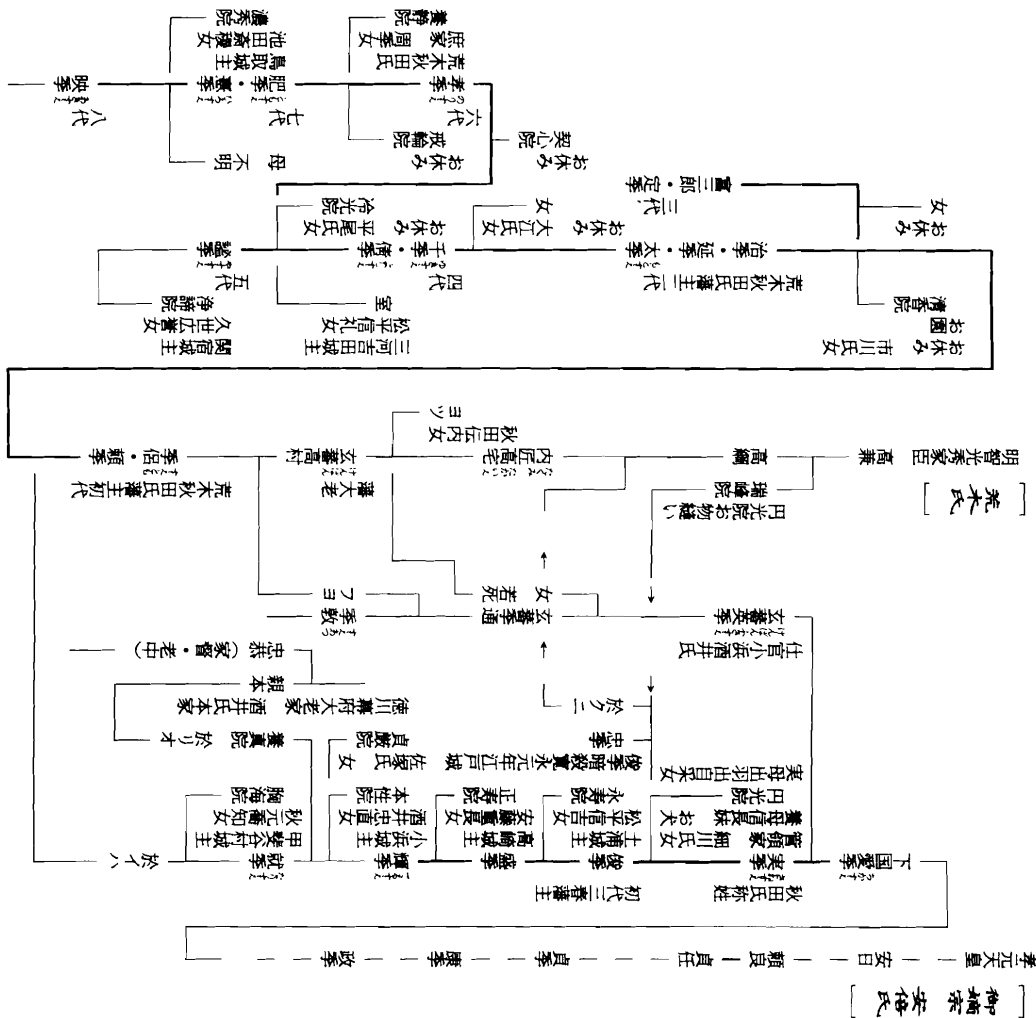
頼季歿後五年、藩主就任四年後、頼季は、於イハを頼季の生前養女とみなして室とするが、この時治季は八才であった。頼季は三十才であるから、清谷院は正室を降りたしと推定される。老中安藤対馬守信友は、世嗣に治季を指名し「藩主養親」の例となった。頼季が藩主となる縁因となった「三番猫騒動」は、岐阜市江幡家文書に詳しく、江幡仲術により「東海女子短期大紀要 第3号」「戦国武将 安倍実季とその子孫」の中に簡単に発表されている他、三春町の寺やその他に物語が伝承されている。

「三春町史」には「三番猫騒動」は、藩内抗争による誤伝であるとし、贈賄事件たる「正徳事件」「享保事件」としての三春藩と幕府による「仕置」を詳述している。

「三春町史資料 8巻」によると、頼季・就季の若君・若姫20名中 若姫3名於イハ於イオ・於トヨ（嫁荒木秋田氏）・於イハを残して17名が早世している。

本論文は、本文「四、ろ、ロ、」に述べる通り、「正徳事件」「享保事件」の原因となる「若君姫17名の早世」を含める「三番猫騒動」は存在したと言う立場にある。

【 荒木高義 系 秋田氏之 系図 終り 】



○ 藩主家紋の変更があった事。

安倍氏の家紋は、「安家之文」から「牡丹に唐獅子」紋、そして、伝承として後鳥羽天皇賜鷺羽 安倍貞季とされ、即ち、後鳥羽天皇から女官の檜扇に載せて韓より献上の鷺の真羽（真羽とは、鷺・鷹の尾翼十二橋のうち左右対象な羽は、真ん中の二橋のみであるがこの二橋を真羽と言う）を賜い、その故事を記念して「檜扇鷺羽」紋を定紋とし、「牡丹に唐獅子」紋を替紋に改め、安倍秋田氏最後の輝季まではこの二紋を使用した。

〔紋画―5〕 檜扇鷺羽³⁶

安倍嫡宗定紋

〔紋画―6〕 牡丹に唐獅子（復元）³⁷

安倍嫡宗替紋



推定復元

荒木秋田氏 初代頼季は、安倍秋田氏藩主紋 十二橋「檜扇鷺羽」紋を用いず、既に拝領していた庶家紋 九橋「檜扇鷹羽」紋に新しく「北斗七星」文を加えて藩主家紋とし、また、「牡丹に唐獅子」紋を「獅子に牡丹」紋と称する。

「北斗七星」文は、父 三春藩大老 荒木玄蕃が主家の若君全員と姫

君ら17名を毒殺した業を恐れ、三春真照寺の勧進により「北斗七星延命經 密教護摩」を焚き、「主家鎮魂・怨霊退散・荒木家安穩延命」を祈願した後、庶家紋 九橋「檜扇鷹羽」紋に新しく加え、九橋 北斗七星「檜扇鷹羽」紋としたと考察する。

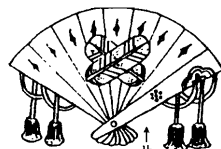
藩主 荒木秋田氏以外に、「檜扇鷹羽」を家紋とする家で「北斗七星」文がある家は存在しない。

〔紋画―7〕 北斗七星 檜扇鷹羽³⁹

荒木秋田氏定紋

〔紋画―8〕 獅子に牡丹³⁹

荒木秋田氏替紋



↑北斗七星文



以後、後鳥羽天皇以来の安倍秋田氏家紋 十二橋「檜扇鷺羽」紋を用いる家は、日本から消え、「檜扇鷹羽」紋の庶家紋家のみ約十家ほどが現存する。⁴⁰「牡丹に唐獅子」紋を保持するものは、約十家の中、荒木秋田氏を含み三家である。

○ 寺紋の変更の事。

三春の安倍秋田氏の菩提寺「高乾院」⁴¹の寺紋が、「安倍氏寺紋」から

九橋⁴¹⁾ 北斗七星「檜扇鷹羽」紋に替わり、菩提寺紋として現在まで存続する。

安倍秋田氏の寺紋 十二橋「檜扇真羽」紋は、安倍氏造営寺である「羽賀寺」と秋田の「補陀寺」の寺紋として現存するほか、実温法印によると津軽安倍寺が、羽賀寺の寺紋のスタンプをお持ち帰りになり、寺紋にしていると言う事である。

○ 歴代の菩提寺「高野山金光院」が関係を絶つ事。

「史談⁴²⁾ 第35号」の『檜山・湊阿安藤家の併合』に詳述しているから再述しないが、応永頃以来の菩提寺である「高野山金光院」との関係が切れる事になる。「高野山金光院」は、紀州徳川家とともに菩提寺であった。

「金光院」は、「三春猫騒動」の兆した千季の六代前の盛季から「秋田家過去牒」に記載していないが、御菩提の供養は荒木秋田氏初代頼⁴⁴⁾季まで行っている。

また、荒木秋田氏二代 延季が、安倍秋田氏最後の姫で、幕府大老家 酒井氏嫡 親本に嫁し、「三春猫騒動」直後に死別離縁となった 輝季女 於り才事 養真院を供養するために、「金光院」に牡丹灯籠を献上したが、それを最終として「金光院」との関係は全く無くなる。その灯籠は、明治後期、廃寺となった金光院を、戦後、再興した西室院が現在保有している。

その牡丹灯籠は現代の金工に作る者無しと評価される名品で、於り才

非道を慰め合ったであろう延季の心からの供養が偲ばれる。

○ 安倍秋田氏古文書の一斉写本の事。

享保十五年（一七三〇）、幕閣と藩閣の「三春猫騒動」に関する秋田頼季と荒木玄蕃らに対する処分が完了し、荒木秋田氏の覇権が三春藩に確立した享保十六年（一七三一）頃から、秋田伝内・細川縫殿・加村左膳・横田甚八らの所有する秋田家・秋田藩家蔵文書の一斉写本が行われたと推定され、荒木氏に都合の悪い所は省かれたようである。

⁴⁵⁾ 三春文書として現存している。

この様な、安倍秋田氏と一歩隔たる荒木秋田氏の諸行の中で、「先住之王家」安倍氏を現す日之本將軍 安倍康季奉納の「安家之文」に、千季は、不安を覚え或いわ呪詛して「安」の字を塗り潰させ、名実共の荒木秋田氏の世を整えたものと推察する。

千季襲封二十二年目の事であった。

なお、羽賀寺厨子の中央の「安家之文」は、法印と論者が調査した後、疵を金泥で塗り直して修復した現況となっている。

疵のある調査前の「安家之文」の写真その他の厨子欄間の詳細写真は、羽賀寺・遠藤巖教授・上原昭一教授・論者が所有する。

厨子の「安家之文」には、実温法印のお考えにより「安」の字は記入せず、浮き出した「安」の字のある桐文様は、そのまま現存している。

「安家之文」の紋画に用いている「安」の字は、実温法印の墨跡であ

る。

三、日本国王 足利義満の桐紋使用と桐紋の政府紋章化

「五七桐」紋が、現在、政府紋章として使用されている事は事実である。閣議室の大臣席の硯箱の紋章、各省大臣の表彰状の紋章などに見る事が出来る。

康平七年（一〇六四）後冷泉天皇 賜紋桐義家は賜紋の嚆矢であるが、後醍醐天皇は再賜紋桐の先例を御創りになり、以後、天皇は信長・秀吉に賜紋桐を行っている。

また、信長・秀吉はこれに倣い、多くの武將に賜紋桐を行った。後冷泉天皇・後醍醐天皇の賜紋桐には、有職故実が存在していたが、その後の賜紋桐は先例があるとして行われたもので、「家中竹馬記」の「きくとときりとは内裏様の御紋なり」という記述が世に盛行し、「内裏様の御紋」として尊敬を受けている世間の事実に基づき賜紋されたものと推察される。

「菊」紋と「桐」紋とが天皇家の紋章であると言う考えは、「日本紋章学」に継承されて、そのため現在も根強く錯覚されているが、室町時代から前述のように天皇も為政者も賜紋桐を行ったから、錯覚を生む余地は存在した。

しかしながら、「菊」は天皇家の紋章であるが、「桐」は天皇家の紋章ではなく三点文様の一である事を既に論証した。

江戸時代、幕府は、歴史上の事実として存在している侵すべからざる

天皇の權威を恐れ天皇の政治的示威行為を封じ込めるため、「禁中並びに公家諸法度」の公布、紫事件などの管理強化を行い、天皇を内裏の一角に事実上押し込める政策をとっていたために、宮廷の「菊」紋と「桐」紋の使用実例を詳らかにする事は出来なかった。

い、義満の皇位窺視と「菊」「桐」の同格化

義満⁴⁶は、二回の明への入貢に際し、「征夷大將軍」の官位を以てしては、入貢を拒まれる屈辱を味わい、幕府の安定を期して日本の対外貿易を一手に収めるために、康暦元年（一三七九）正月の後円融天皇御才22才からの賜天盃の時、摂政関白の進退に擬し、天皇と対等に振舞って以来、漸進的に王権篡奪を進める。

治天の君 後円融が薨じた明德四年（一三九三）四月二十六日から、年少の後小松帝を置き、義満は、後円融のあとを継いだ治天としての行為を積み、応永九年（一四〇二）、遂に「日本国王」に冊封され、応永十四年（一四〇七）には後小松帝の「准父」となる実績を重ねる。

義満は、遂に、上皇に擬される事実を挙げ、対外貿易を手中にする事に飽き足らず、皇位を窺視するに至る。

そして義満51才は、第二子義嗣14才を皇太子に擬する盛儀を北山第で催す。

その盛儀は、応永十五年（一四〇八）三月八日から二十八日までの二十日間に亘ったが、天皇の行幸を仰ぎ、前年義満が「准父」となった事と、併せて、義嗣を皇位後継者にする事を、関白以下廷臣列座のもとで

披露する儀式であった。

後小松天皇32才の北山第への行幸を、禁裏から仙洞への朝勤の例によらしめ、自らは天皇上皇に用いる縹緗縁うんけんりの畳に座して上皇に擬し、関白藤原経嗣以下諸卿及び高家 細川・斯波・六角・一色・土岐・大内ら皆が庭で蹲居する中を、義嗣に「天杯」を受けさせ笏を取って「拝賀奏慶」の舞踏を行わせた。義嗣は、三月四日、元服前にも関わらず、従五位下に叙爵されていた。

また、正月から準備を進め、天子の御座を八棟八龍他に十三ヶ所の御殿を造営し早咲きの桜を植え、金銀・珊瑚・瑠璃・琥珀・銘木・銘石・和漢の名品名花に飾り立てられた御殿の合間の、御水やりの間、御清めの間には「菊」「桐」の蒔絵や「菊」「桐」の金器が飾られていた。

いずれも、有職故実や先例にない事であったが、縹緗縁の畳に座す義満の法体像は、昭和三十年（一九五五）金閣寺焼失まで閣内に存在し、天皇群臣の列席した御殿に初めて同格に並べられた「菊」「桐」は、また、准父の故実となったと考察する。

四月二十五日、義嗣は、親王元服に准拠して内裏において加冠之儀を行い、参議従三位に補され、義満の遠大な計画は「北山第之儀」を以て終局に至ったと思われる。

しかし、義満は、四月二十八日病に伏し、五月六日に歿し、「皇位篡奪」は成らなかった。この義満の「皇位窺視の失敗」は、最終的に、侵す事の出来ない天皇の不思議な権威の、歴史上の多くの事実の一つの例として指摘されるものとなっている。

ろ、「五七桐」の朝廷紋章化

順徳天皇五世の孫で、皇統ではなかった義満は、王権を篡奪し皇位を窺視する僭上を重ねたが、朝廷は、逆臣としたわけではなかった。

勿論、僭上を非難する記録は残っているが、日記などの内々のもののみである。

朝廷は、義満を准皇として皇族に列し、准父を認め、諸々の有職故実破りは新例を作ったものと見なし、天皇の下々の律令制度には何等の変更は無いとした。

「日本国王」の僭称⁴⁶についても、明国の冊封であり、日本の律令制度とは関わりの無いものであるから一向に差支え無いものと解釈したのである。

そして、義満の歿後二日の五月八日、前の関白 藤原経嗣と伝奏 日野重光らの議により、朝廷は、故義満に尊号「太上天皇」を贈る。

將軍義持は、これを辞退して以後、旧来の律令制度下の有職故実に戻るが、「日本国王」を僭称でなく差支え無いとする先例と、「桐」が「菊」と同格と見なされる先例とは、義満の新例に基づき有職故実になったと推定する。

沼田博士は、「北山第の菊桐」と「家中竹馬記の菊桐」の事を引用して、「菊」「桐」が天皇家の紋章である事の典拠としたが、時代を追って見ると次の通である。

- 一、康平七年 一〇六四。後冷泉天皇の安倍家の「桐」下賜の故実。

二、建武元年 一三三四。二百七十年後、後冷泉天皇の故実に基づき後醍醐天皇の尊氏に対する「桐」再賜。

「桐」も天皇御紋章と世俗的に誤認される原因。

三、応永十五年 一四〇八。さらに百三十四年後、准父 義満による北山第の「菊桐」同格の故実。

四、永正八年 一五一。その百三年後、「家中竹馬記」の「きくきり」の記述があり、世に「桐」も天皇家御紋章であると誤認されていた事実。

従って、「北山第の菊桐」と「家中竹馬記の菊桐」の事は、「桐」紋が天皇家の御紋章である事の典拠にはならない。

後醍醐天皇以前に「五七桐賜紋」の慣行は無く、後醍醐天皇以前以後に「五七桐」紋を天皇家の紋章とした事例を見る事が出来ない。

応永十五年（一四〇八）義満による北山第の「菊」「桐」は、「桐」が御紋章と同等になった最初の故実と考察され、朝廷は、将軍家とともに「桐」を紋章として用いる慣行を生じたと推察する。

なお、天皇による「賜紋」の慣行は、後醍醐天皇から、後陽成天皇による徳川家康に対する慶長十六年（一六一二）正月廿二日の「賜紋菊桐」の意向打診まで続いている。

家康が辞退して以来、「賜紋」の例は無い。

四、「安家之文」の栄枯盛衰

論者は、昭和六十三年（一九八八）八月三十日、羽賀寺御住職 丹生実温法印とともに「安家之文」の現存を確認してから、「安家之文」にかかる史料遺物を出来るだけ広く点検する事を行った。

まづ、室町幕府文書「見寄諸家文」の写本の現存する28冊について、凡そ四通りに書き分けられている「御紋由緒」について、その祖型は何れであるかを点検し、岩瀬文庫所蔵の1本「見寄諸家文」の「御紋由緒」である事を確定した。

確定された「御紋由緒」を基に、その内容が真実かどうかを、本稿『「安家之文」が導く「五七桐」』で検討し、確かに故実と考察される事も確認した。

しかし、義家・頼朝に「五七桐」使用の事実を史料上に見出だす事は出来なかった。

これは一論文を要するテーマであり、古来一族の象徴たる家紋は、宗家だけが使用し、また、常時は一族の「神の間」に大切に管理され、安易に表に出す事はなかった為であると思われる。

参考までに、紋章・²⁸印象²⁹を使用する先行民族集団である古代メソポタミア民族に於いては、紀元前十四世紀頃に栄えたウガリトを発掘した時、公開の場では見る事の出来ない十四弁ロータス紋が、神殿の側の溝から金の神器に刻まれて出土し、また、前五世紀、古代オリエント最後のアケイメネス王朝の謁見の宮殿ベルセポリスでは、外壁に多数の十二弁のロータス文様装飾があり、王の謁見の間では、十六弁のロータス紋が柱

頭に飾られている。

ウガリトから九百年後、ペルセポリスを建設したダイオレス王もロータス紋と弁数について知識を弁えていたと推察され、出土してはいないが、推論すれば三十二弁は、王座もしくは神殿に飾られていた可能性があるという思考が出来る。

「安家之文」の裔である「五七桐」紋が史料に表れ始めるのは、後醍醐天皇以後である。「安家之文」は、後醍醐天皇の賜桐紋尊氏から九十二年後、日之本將軍 安倍康季の羽賀寺奉納によって初めて世に現れる。康季は、天皇に「先住の王家」と「村上源氏外戚」とを認められた事に歓喜し、「安家之文」を奉納したものである。

「安家之文」を後冷泉天皇に召し上げられてから、安倍氏は、新定紋として「牡丹に唐獅子」紋を定め、そして新々定紋「檜扇鷺羽」紋の使用にも拘らず、厨川の敗戦から三百八十四年後、日之本將軍 安倍康季による「安家之文」の羽賀寺奉納が行なわれた事は、「安家之文」を隠紋として保持し続けていた事になり、安倍氏の「安家之文」に対する矜持と信仰に近いと推察される意思を深く思わざるを得ない。

そして、安倍宗家は、「安家之文」・「牡丹に唐獅子」を護持する者であり、「安家之文」は、内紛・疲弊の中にあっても、一族の総帥たる象徴であつたのであろうとの推論を生む。

天皇家もまた、安倍家の渊源に思召しを垂れ、天皇家の三点文様「鳳凰・桐・竹」を 日之本將軍 康季に賜い、そして、天皇家の「桐」に替えて「安家之文」の使用を御許しになられた寛容は、他に例は無く驚くばかりである。

正親町天皇が、天正五年（一五七七）、安倍⁵⁰⁾下国^{（よくだくに）} 愛季^{（あいき）}を従五位下に叙任するに際して、左大臣 九條兼孝・上卿 三条西実枝ら朝廷は、長髓彦・貞任の「勅勘之先縦」を問うたが、これは有職故実を誤り用いて信長の武家執奏に一矢を報いたものと推察され、天皇家は、実は 日之本將軍 安倍康季に、「先住の王家」、フーゴ・ストロールの言う「王家の紋章」の家として相応しい処遇をなされていた。

「安家之文」は、日之本將軍 安倍康季から三代目の政季の時に、「見眷諸家文」に採録され、この事は、政季が、時々、上洛していた事を証し、政季の「政」が義政の偏緯⁵¹⁾であると推定される事と、文明十四年（一四八二）の日本国王 源義政の朝鮮遣使に、政季が「夷千島王^{（えいせんしやう）}」を称して家臣 宮内卿を随行させたとする見解とを傍証する。

安倍氏には神仏・天皇・朝廷・幕府に対しては「一、本姓安倍を用いる。二、本紋「安家之文」を用いる」習慣があつたと推定されるが、政季の「安家之文」使用は羽賀寺「安家之文」とともにその例とする事が出来る。

政季の墓碑に用いた紋を観察すると、「檜扇鷺羽」と判定されるから、羽賀寺の例とともに安倍氏の「安家之文」に対する慎重な取扱が判明する。

江戸時代初期、日之本將軍 安倍康季から七代後の秋田実季^{（あきまき）}は、安倍家について渊源・家紋などの記録を残し、「牡丹に唐獅子」紋「檜扇鷺羽」紋については述べるが、隠紋として政季まで四百年以上も保持し続けていた事が確実な「安家之文」について全く語っていない。

安倍氏に極めて重要な「安家之文」の伝承を失う理由は、全く不明で

ある。

実季以前の約百年程の間に、「安家之文」の伝承は、安倍氏から全く無くなり、羽賀寺厨子にのみ身を潜め、呪詛塗り込めの難を被る事になった。

「五七桐」は、家紋が広く使用されるようになる慣習によって、後醍醐天皇以後、天皇の賜う家紋の地位を得、朝廷の紋章となり、徳川時代の酒晦をへて、明治維新で華々しく復活する。

「五七桐」の中軸の下「丸」は、「安家」を表わす。

「安家之文」は、「五七桐」紋に姿を替えて、「日本国政府紋章」に生まれ代わっていた事になる。

沼田博士の「日本紋章学」の冒頭自序の「誤れるを正し、足らざるを補い、この学をして発展完成せしめられんことを」に従い、沼田博士の論旨を極め、「菊」「桐」「安家之文」「五七桐」「御紋由緒」について、些か発展する所があったのではないかと考え、本稿を以て世に質するものである。

五、おわりに

本稿は、「菊」「桐」「安家之文」「五七桐」「御紋由緒」について、包括的な史料分析を行い、それらの関係及び由来を明瞭にしたものであるが、広範囲に亘ったため、紋章の画型の時代的変遷その他に、なお説明を必要とする部分が残されている。

それらについては、「研究ノート」その他の小論文をもって、逐次、

稿を公開したい。

中でも、大友家「五七桐」紋は、「頼朝賜」と伝えられ、頼朝の「五七桐」紋を傍証し、その古型の故に、義家「五七桐」紋と「安家之文」の祖型を推定させるものとなる。

引いては、「高星丸の藤崎落ち」の文献史を紋章学上証明し、文献史を傍証するものとなるために、特に、論拠を明らかにする必要がある。それについては、稿を改め「頼朝の家紋」の題で論じたい。

論者は、史の記述が蓋然性の高い確率で事実であるためには、文献学・考古学・宗教学・易学・民俗学・紋章学など、人類の残した全ゆる史関連学からの整合が必要であると思考するが、「紋章学は、氏素性を証明するに欠かせない学問」で、ヨーロッパでは確立していると沼田博士が述べている。

本稿が史に何らかの貢献するところあれば、幸いと思う者である。

注

- (1) 秋田四郎「見聞諸家紋」群の系譜（『弘前大学国史研究』九九号、一九九五年）。
- (2) 「家中竹馬記」群書類従卷四百十八・武家部十九。
- (3) 「日本紋章学」本稿「沼田博士の「御紋由緒」の否定」。
- (4) 「見査諸家文」一四七四年頃、室町幕府文書。写本 岩瀬文庫書架（3962-4-100）。
- (5) 「羽賀寺縁起」羽賀寺藏文書。日本思想大系「寺社縁起」に「本浄山羽賀寺縁起」大永四年（1524）を桜井徳太郎が解説しているが、

底本「大縁起伊予法眼筆写」とともに散逸している。実温法印によると、昭和二十年代前期に貸与散逸したと言う事である。羽賀寺には、貸与未返還の宝物や、借用存在の高名な色紙などが存在している。理由が判るものもあり、判らないものもある。

(6) 『重要文化財羽賀寺本堂修理報告書』同委員会、一九六六年。

(7) 「秋田系図」

(8) 羽賀寺藏文書。

(9) 井上正「福井・羽賀寺十一面観音立像」(『日本美術工芸』三一五五八号、一九八五年)。

(10) 高橋富雄「日本中央と日本將軍」(『弘前大学国史研究』七〇号、一九八一年)。

(11) 『青森県上北郡天間林村史』(一九八一年)の「第二編第二章 壺の碑伝説と都母村」。

(12) 「日本紋帳 JAPANISCHES WAPPENBUCH=NIHON. MONCHO=」WIEN '06。

HUGO GERARD STROHL。国会図書館書架(B-2.144.)。

(13) 高野山金剛峯寺宿坊「西室院」所蔵の秋田氏「牡丹灯籠」1742。

(14) 『秋市史』第一巻 二、指月山周辺の歴史的背景 5 一門家中の紛争「吉見広長の誅伐」、『近世防長諸家系図総覧』「二、一門大野毛利家」、『吉見町史』第三章第四節吉見氏の盛衰。長沢士朗(吉見町)所有吉見氏家譜。長沢士朗「源範頼異聞」『吉見二郎と男衿三郎絵詞』(『広報よしみ』昭和五十七年No.174)昭和五十九年No.201)。

(15) ◎墓碑の発見◎ 89.6.20.日光散策中、鬼気迫る雰囲気のある

含満ヶ淵に至り、東照宮造営の寛永十三年(一六三六)に安置された百体の「御化け地藏」を拝し、その傍に苔蒸した石碑を見た。

6.25.(日曜小雨)了解を得て苔を研ぎ、紋と碑文を読んで、南部氏に医家として仕官した上領氏が、寛保二年(一七四二)に建立した事を確認した。現況は、苔を研いだ調査時のままになっている。

吉見町文化財保護委員・町史編纂委員 長沢士朗は、範頼系譜に関する現存の系譜・史料を総覧し、範頼直系と推定した系譜が、南部氏に医家として仕官した上領氏である。碑は、亡父の齒二枚を敷いて、「御化け地藏」とともに東照宮に向かって立つ。

二荒山(日光山の原名)輪王寺は、義家が「前九年之役」安倍氏討滅を、頼朝が安達義景を代参させ「奥州征伐」の戦勝を祈願して「清和源氏」と因縁深く、「清和源氏」の墓があった。その墓地の骨を含満ヶ淵の大巖石に移し、跡地に「東照宮」を創建した。安達義景墓石のみ東照宮地横に現存する。

当時、「清和源氏」義家直系に任じていた建立者は、「御化け地藏」と同様に二荒山輪王寺の了解のもと、その所有地に碑を建立したと推察される。

範頼は、史料「吾妻鏡」に関わらず三浦郡浦郷村(現金沢)大寧寺に在り、子孫は、範頼乳母比企氏領吉見に住む。足利尊氏の頃、吉家は能登に在りて「建武中興」に馳せ参じる。後、津和野領主を経て、萩を領し「朝鮮征伐」参戦後、「吉見広長の誅伐」の通り、吉家は毛利家に滅ばされる。

しかし、吉見広長 嫡は、朝鮮王家の女を母としたため、正室に疎まれ医業修業のため寺に在り、江戸に逃れて上領氏と名乗り南部氏に医家として仕官する。

家紋は「五七堂桐」である。論者は、長沢士朗の論を支持する立場にある。

現当主は、「当家には、必ず滅亡すると言う伝承があり、私がその代に当たる」と語り、老齡の母とともに妻子なく暮らす。

『水沢市史 第二卷』（一九七六年）。同 7 資料編（一九九三年）。『留守氏系譜』（解説 中世留守家古文書 一九七九年）。

『留守氏系譜別本』（一八九〇年謄写。東大史料編纂所書架（2075-945））。

渡辺澄夫、「第一 豊後大友氏の出自について」（『増訂豊後大友氏の研究』一九八二年、第一法規出版）。

『吾妻鏡』文治元年（一一八五）四月十四日丁卯、今日「波多野四郎経家号大友」自鎮西帰参是斎院次官親能之舅也、即召御前令問西海之事給云々、

豊前大友氏祖能直は、母が経家の三女であるが、系図には経家の子、「実外孫也」として書かれる。

『吾妻鏡』文治五年七月十四日壬申、為征伐依可令赴奥州給、為御供被催「波多野五郎義景」之處、進奉之後、讓所領於幼息、是向戰場不可歸本国之故也云々、二品聞食之、頗有御感云々、

本籍水沢市『大友氏家譜』。現当主親の祖父親義が写本。

(20) 『川西市史 第二卷』（一九七六年）の「第二章第二節2多田院の再興」。

(21) 『諸家紋起抄』大尾本。写本、岩瀬文庫書架（7175-98-32）、1858 写本 静嘉堂文庫書架（13764-1-80-6）。

(22) 『御召御紋帳、御召縫入御紋本』1844。都中央図書館加賀文庫書架（1586）。

(23) 『紋かがみ』（一九〇三年、大島屋呉服店。3280家紋所載）。

(24) 『紋典』（一九八八年、芸艸堂）。480紋所載。

(25) 星野恒「頼朝の紋章」（『史学雑誌』四篇四七号、一八九三年）。

(26) 松本文五郎「菊紋」（『印度雑事』一九〇三年、六盟館）三四二頁。

(27) 『岩波講座世界歴史』一古代1「古代オリエント世界」（一九六九年、岩波書店）、『岩波講座世界歴史三古代3「南アジア世界の形成」（一九七〇年、岩波書店）

(28) 『人類の美術』『アッシリア』（一九六二年、新潮社）。

『世界美術大系』第 卷「オリエント美術」（一九六三年、講談社）。

『人類の美術』『シュメール』（一九六五年、新潮社）。

『世界美術2』（一九六六年、講談社）。

『世界の文化史蹟』第二卷「オリエントの廢墟」（一九六八年、講談社）。

『図說世界の考古学』2 古代オリエントの世界（一九八四年、福武書店）。

『ルーブル美術館 古代オリエント』（一九八五年、日本放送出版協会）。

『メトロポリタン美術全集』『古代エジプト古代オリエント』（一九八七年、福武書店）。

川崎真治『日本最古の文字と女神画像』（一九八八年、六興出版）。

川崎真治は、古代オリエント世界で神名を数で表す事を論じている。
Horst Kluge『古代シリアの歴史と文化』（一九七九年、Berlin、一九九一年、訳五味亨）。ウガリト14弁黄金神器埋没前後の歴史的背景が詳しく推定されている。

『古代シリア文明展』（一九八八年、NHKサービスセンター、西武美術館）。

日本オリエント学会（名誉総裁三笠宮・総裁江上波夫）の会誌を閲覧した所、楔型文字の解説が主流のように見える。

川崎真治『世界最古の文字と日本の神々』（一九九四年、？）

(29) 『MANUAL D'ÉPIGRAPHIE AKKADIENNE』 PARIS '63.。RENE LABAT。古代オリエント博物館蔵書 五味亨寄贈。古拙楔型文字 BC3000年紀以来の変遷文字辞典。日本語楔型文字辞典は無く、最高の ARCHIEV は WIEN で編纂中で 26 巻を数える。

(30) 『印章の世界』（一九九一年、古代オリエント博物館）。

(31) 『オリエント美術』七〇頁。『ルーブル』一一一頁。

「十六弁」大芋氏（任那帰化族）、設楽氏（景行後裔）、横越氏。

「八弁」、熊谷氏。「見香諸家文」147頁頃。

広隆寺（七世紀頃創建）本尊聖徳太子像胎内御物「八弁 塞（乾

漆）製花鳥文箱」

(33) 佐藤寒山「山城鍛冶」（『日本の美術』75No.107 年）

「後鳥羽上皇御宸影」横滨原富太郎氏所蔵。

(34) 『三春町史』『三春文書』

(35) 山階鳥類研究所、鷺鷹研究員による。

(36) 「実季使用膳」伊勢朝熊 永松寺蔵。『檜扇鷺羽』紋。

(37) 湯沢安東氏伝承 最古型「牡丹に唐獅子紋」及び宇都宮佐藤氏伝承

古型「牡丹に唐獅子紋」及び、平安期 1026 頃平等院梵鐘の『獅子』、金剛峯寺蔵「佛涅槃圖」平安期 1086 絵画『獅子』、東本願寺門扉『獅子』、「見聞諸家文」群の「獅子牡丹」紋『獅子』、徳川氏の日光と高野山の廟堂『獅子』、南部氏『獅子』と、荒木秋田氏江戸期『獅子に牡丹紋』を参照して戦国時代末期に復元。湯沢安東氏・宇都宮佐藤氏・荒木秋田氏の紋は、互いに良く相似しながら、時代の特徴を現している。

(38) 『寛政重修諸家譜』『秋田氏』。

(39) 龍穩寺藏荒木秋田氏「姫籠」紋。秋田一季氏提供「秋田のいにしえ」誌表紙紋。

(40) 「檜扇鷹羽・牡丹に唐獅子」両紋家は、湯沢安東氏・宇都宮佐藤氏

（慶長秋田離臣）の二家。「檜扇鷹羽」紋家は、湊孫十郎家（湊英季家、湊学家、千葉湊家などと称されている。天正・宍戸秋田離臣）、安東茂兵衛家・湊元貞家・湊又兵衛家（慶長秋田離臣）、安倍英季家（宍戸秋田離臣）、宮城安部家（天正秋田離臣系か）など約七家。三春藩家には、藩主家以外に「檜扇鷹羽」紋家はない。安倍

秋田氏系譜の家に「扇紋家」「鷹羽紋家」がある。

三春高乾院の本堂幕紋。

『史談』土崎史談会誌、年一回発行。

高野山金光院「秋田家過去牒」1898 謄写。東大史料編纂所書架(2043-104)。

「江幡家文書」三春歴史民俗資料館。江幡家、在岐阜市。

「三春文書」三春歴史民俗資料館。

今谷明『室町の王権』（一九九〇年、中央公論社中公新書）。

近藤瓶城『足利治亂記 下 北山御行事』（一九〇二年、近藤活版所）。本文には源賢弘の上注があり「故実先例が無く偽作である」

旨が述べられ、瓶城も上注して賛同しているように見える。国史辞典も信頼性に薄いとされている。しかし、今谷明は同時代史料を駆使し義満の故実先例破りを証した。

上注と国史辞典は、再検討を要しないか。

『オリエント美術』四三頁、『古代シリア文明展』八一頁、Hornst Kienz『古代シリアの歴史と文化』他。

『オリエント美術』一二二頁、『古代エジプト古代オリエント』一一〇頁、『2 古代オリエントの世界』一六四頁、『第二卷オリエントの廃墟』八五頁、『ベルセポリスの十二弁』（『世界美術』2）一二九頁、『ベルセポリスの柱頭の十六弁』他。

遠藤巖「戦国大名下国愛季覚え書」（『北日本中世史の研究』一九九〇年、吉川弘文館）。

遠藤巖「戦国期檜山城主下国家関係の一史料」（『秋大史学』三八号、

一九九二年）。

村井章介「朝鮮に大藏経を求請した偽使について」（田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』一九八七年、吉川弘文館）。

「羽賀寺文書、実季書簡」「秋田家系図」その他実季語り書。

「秋田家系図」に「高星三歳時乳母懷而逃津輕藤崎」とある。渋谷

鉄五郎『秋田「安東氏」研究ノート』（一九八八年、無明社出版）。

七宮倅三『津輕秋田安東一族』（一九八九年、津輕書房）。

（あきた・しろろ 日本都市計画協会評議員）